



発行 KOA 森林塾 (事務局) 0265-70-7065 編集 坂野慎治 題字 島崎洋路

『出すならば』 通年コース第九・十回開催報告 「伐出」

前日までの秋雨は止み、季節の移ろいを予感させる風と薄青色の晴天にむかえられた伐出の回。伐って出すというの、伐倒から枝払い・造材、そして集材・搬出の一連を指



引き寄せて、そのまま自走のロギングトラクタ

実践。 最近の林業現場では、プロセッサやハーベスタなどの高性能林業機械が活躍を始めていますが、森林塾では、小回



積んで運べる、キャタトラ「やまびこ」号

りのきく、怪しげな機械三種で。インターネットで検索するとたこ焼きチェーン店ばかりがヒットする商品名の自稱携帯型ウィンチ「ひっぱりだこ」。ホイールタイプで、ウィンチを二基も装備し、車体の真ん中で上下に左右に揺れるロギングトラクタ。クローラ(キャタピラ)タイプで、小さ

な本体に、ウィンチと手動のタワーと積載デッキを装備したキャタトラ「やまびこ号」。それぞれの機械を扱う時間ですが、特徴を掴んでいただくことはできたでしょうか。大型の林業機械や架線系のものでは、全幹(伐倒・枝払いをして幹だけにした状態)や全木(伐倒しただけの枝葉がついたままの状態)で集材できるものもありますが、このような小型といわれる林業機械は、玉切りをした三mや四mの材を集材・搬出する、短木集材に適しています。



柱材用に、検尺です

林内のどこにでも設置して材を集めたり、木々の間を縫うように走行できるのですが、頻繁に集材位置を変えたり、長い距離ワイヤーを引き回すのは得策ではありませんので、例えば魚の骨のように集める経路をあらかじめ決め、それに応じた伐木造材を出すならば、伐るから考える。それが「伐出」のおもしろさ。

通年コース 第九・十回 間伐

9月15日(金)

8時30分

島崎先生の山小屋に集合。日程のあと、早川講師の挨拶。班分けは、前回と同じ。

8時40分

身支度が終わったら、分乗して、先月間伐をした西春近の現場へ向かう。

9時10分

現場着後、機材を準備して伐出開始。後藤さんの班と川島さんの班は間伐。前回のことを思い出しながら、矢を使った伐倒にもチャレンジ。一方、平林さんの班と藤原さんの班は、ひ

ぱりだこでの集材。簡単なウィンチでも力持ち。造材・玉掛け・運転を役割分担してローテーション。 各班毎に林内で昼食。

12時5分

13時

伐出再開。午後は、後藤さんと川島さんの班が集材、平林さんと藤原さんの班が間伐。林分が明るくなり、材が寄せ集められていく。

15時35分

後藤さん・川島さん・平林さんの班は作業を終了し、





帽子をつけて、ひっぱりだこ



大径材もなんのその？

小屋へ。藤原さんの班は、チルホールを使った、かかり木の処理に苦勞。16時

藤原さんの班も作業を終了し、小屋へ。

16時30分 講師講評、諸連絡にて終了、解散。

9月16日(土)

8時30分 島崎先生の山小屋に集合。講師挨拶、日程説明・注意事項連絡、炭焼きのときの交流会の連絡など。

8時50分 七月の伐木造材で伐倒をした小屋横のアカマツ林へ向かう。

9時5分 伐出開始。川島班・藤原班は伐木造材。後藤班はキャタトラで、平林班はロギングで集材。キャタトラとロギングは、運転するだけでも大変。

10時30分 後藤班・平林班が伐木造材。川島班がキャタトラ、藤原班がロギング。

12時10分 雨が降ってきたので、小屋

へ戻り昼食。

13時5分 雨も止み、伐出再開。後藤班・平林班が伐木造材。川島班がロギング、藤原班がキャタトラ。

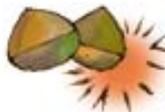
15時 川島班・藤原班は伐木造材。後藤班がロギング、平林班がキャタトラ。

16時15分 現場作業を終了し、小屋へ。

16時40分 講師講評、諸連絡をして終了、解散。お疲れ様でした。

参加者/石垣さん、石田さん、石原さん、井上さん、榎さん、大村さん、川越さん、小池さん、坂上さん、高野さん、高橋さん、長田さん、堀江さん、山本さん、吉永さん、小名川さん、熊木さん、松岡さん、園田さん、長坂さん

講師/早川講師  
スタッフ/川島、後藤、平林、藤原、坂野



次回以降の予定

専門コース

第三回

10月5〜7日 (木)土

早いもので、専門コースは今年度最後の開催となります。安全・確実な伐倒、幹に沿った丁寧な枝払い、重心を見極めた造材。伐木造材の集大成を目指して。ご希望があれば牽引伐倒やひっぱりだこ集材も可能です。

現場は、小屋裏の旧日影区有林を予定しています。

8時30分、島崎先生の山小屋に集合です。



チルホール、準備完了!

第十一・十二回

10月13・14日(金・土)

見学・枝打ち

一日目は、伐った木の、その後...。午前中に有賀建具店さんで建具や家具の加工。材の見本を、午後は、長野県森林組合連合会の伊那木材市場にて、木材流通の一端を見学させてもらいます。

二日目は、特別講師の保科先生による枝打ち講座。午前中に、ぶり縄を作って木に登

集中コース秋の部

11月2〜4日(木)土

8時30分、島崎先生の山小屋に集合です。

KOA森林塾のエキスを集めた三日間です。樹を測る測樹やチェーンソーを使った伐木造材、そして簡単な集材まで一通りの事をやってみます。盛り沢山になるかと思いますが、何かひとつでも持ち帰りいただければ幸いです。

募集締切は10月10日(火)です。

# リレー通信

## 今後の林業の「業」に関する一つの提案

坂上 暁



通年コースに参加させていただいき、山造りに関する様々なことを基礎・基本から教えていただいています。そして、参加者、インストラクター、事務局の皆さんと楽しい雰囲気の中で、自分なりのペースで山造りの技術と知識を少しずつですが、身につけているところです。また、帰りの新宿行きのバスの中では、おいしいビールとともに心地よい疲労の中で、もう既に翌月のKOA森林塾の日が



来るのを楽しみにしているところです。現在の私の最大の関心事は、林業の「業」=ビジネスとしての確立です。簡単にいうと、山に囲まれ、山仕事を生活したい！なのです。しかし、振り返ってみると住宅ローンはあるは、二人の子どもは小学生で、どうにも今の生活から脱却できないのです。それでも、何とかしたいと思い、日々準備を重ね、早い時期に実行に移してしまおうとビジネスプランを考えているところです。

まず、林業が「業」として確立するには、山の所有者と施業者が分離していることを考えると、所有者と施業者との信用と継続性の確保が最重要ポイントだと思います。山仕事は、植林から収穫まで八十年とも百年に亘る長期の事業であり、所有者も施業者もお互いに生育期間の一部にかかわらない計算になりません。施業者は、長いスパンの中で、全体計画を立て、系統だつて施業できる組織である必要があります。そこで、ボランティアよりNPO、NPOより一人親方、一人親方のチーム、組合契約、事業協同組合、会社組織等で施業をすすめるべきであると思

考えています。次に、収益構造を確保できることが必要だと思います。それは施業者と所有者に双方に、収益を確保できる必要があるということです。所有者には八十年後、百年後の資産価値の向上を確保させ(科学的・学術的な分析に基づく森林診断などによる必要がある)、施業者には労力に見合った正当な報酬の確保をしていく必要があります。しかし、施業者の報酬としては、管理費や間伐材、山の副産物の収穫など利・活用権の確保だけでは十分確保できるとは思えません。そうすると、できるだけ収穫された材に対するブランド戦略しかないと思うのです。国産材が流通経路と規格揃えでは、外国材の薄利多売戦略に対抗できないのならば、伊那の木材は魚沼産コシヒカリをめざし、グッチの「ヒノキ」にさせてしまふ必要があると思います。また、この人あるいはこの人たちが手入れしたアカマツはアカマツ界のピトンであり、このピトンの木材を一部でも使った家は最高級品なのだと思



う信用イメージを普及させてしまふ必要があるのです。しかし、それには、当然ながら市場調査を行い、顧客満足度を上げ、クオリティとしても最高級の仕事をめざさねばならないのです。そして、そのような木材のみを市場に提供する「KOA森林塾ブランド」?の確立しかないだらうと仄かに思うのです。また、山の施業は、どうしても国や県の補助事業に頼り、偏る傾向があると聞いています。しかし、所詮、現場にいない役人の考える補助事業の内容には限界があると思

います。やはり施業者は、協働・環境・共生等のキーパードをつまぐ活用し、役人が補助したくなるような、しかも山の利・活用に必要な補助事業を組み立て、提案していく必要があります。そして市や県、森林組合等の林業関連部署をつまぐ取り込む必要もあると考えています。そうは言っても、やっぱり、「山の無料診断」から入って、「管理の提案」事業が一番かなあなど、もう頭の中は、暇を見つけているような状況です。もうこれは、「KOA森林塾中毒患者」だなあと時折自分でも思っています。いろいろ好き勝手なことを書きまわした

うなあと思っています。人生の三分の二を過ごし、残りの三分の一をどのように生きていこうかと考えるとき、様々な選択肢があると思います。このまま定年まで過ごし、再雇用をしてみらうて、残り五年くらい年金でんびり過ごすのも良いだと思

初めて木を倒しました。チェンソーの轟音と緊張で頭は真っ白、そして身体はこわばったまま。三度目で少し落ち着いて切ることができました。あとで倒れた木を見て、ここまでどんな風に成長してきたのかと思いましたが、すぐに倒した時の興奮がかき消されました。その醍醐味を感じたくて参加したのだから。五十六歳、無職、長田伸寛といます。さて森林塾に参加して、なんとか八日間の講義、実習を受けることができ

# リレー通信

## 我が身にあう山造りに向かって

長田 伸寛



ました。予習、復習もせず、一割も身につかず劣等街道まっしぐら、とりあえず参加することに意義があると自分に言い聞かせて続けています。塾開催の日が近づくと、重い腰をあげて琵琶湖の南、大津市から、六時間ほどかけて車で来ています。そんな僕の履歴と今の心境などをつづりました。



日本は高度経済成長を経て豊かな社会となったようです。その推進役の団塊の世代のしっぽで生きてきた僕は、のんびりと大量生産・大量消費のおこぼれを頂戴してきました。そんな僕でも、ものごとの大切さが少しは分かる歳になったようです。小学生のころ楽しみは大坂のデパート食堂で年に数回ホットケーキを食べることでした。今も数少ない楽しみの一つとして、スーパリーの安い喫茶店で月に二回は行って居るでしょう。か。もつたいない精神の実践と幼少の心に戻りたいためかしら。

この四月から滋賀県でも、神奈川や高知について森林税を始めました。一人年間八百円、主な目的は県民に森林の大切さを啓蒙することです。シンポジウム、講習会、子供たちが森とふれあうイベント



など様々な活動が行われていますが、県下の国有林、民有林とも、やはり間伐が遅れ、山は荒れている、ここ近江の森も日本のどこでも見られる現

状と同じです。そこで、地元の木で家を建てる活動、里山や河畔林を手入れまた環境教育の場とする森林ボランティアの動きなど熱心に行っており、またまだ林業の経済的な自立や森林整備にはほど遠いようです。今年はそのへ新しい息吹が吹きました。川や森など自然環境を保全し、また豊かな社会を再考する「もつたいない」をスローガンとした環境学者の女性知事が誕生しました。なにかが変わりはじめていることを予感させます。

生まれ故郷の尼崎は、煤煙と地盤沈下の町として有名でした。関東でいえば川崎と似ているのかな。先日東京アクアラインという東京湾をまたがる巨大な橋を渡りました。その時、川崎を通りながら工場の敷地がとてつもなく狭く、民家を見て尼崎を思い出しました。そんな町から抜け出し

たかったのでしょうか。自然のかけらもない高層ビルと高速道路が縦横無人に走っている未来都市の絵を描き、下手な絵だったのに小学校の写生大会で銅賞をもらって喜んだことを覚えています。それから数十年後、日本の多くの町が無味乾燥な人工都市になってしまいました。そんなまだ薄汚い自然がない下町から、十歳の時、親父が大坂のベツドタウン寝屋川市に夢の一軒家を建てました。空気がきれい、住宅もぼつんぼつんと地などがいっぱいあり、しばらく肌にあわず困りました。しだいにそんな環境に慣れたのか稲わらで家を作った昼寝をしたり、近所の池で水遊びをして結構楽しんでいました。

今、二十代男子三人、妻、と僕で五人暮らし。裏に標高五百メートルほどの山がある百八十軒ほどの団地に住んでいます。裏山はヒノキの民有林で、林内はあまり明るくなく樹高十五メートルぐらいの人工林です。ときどき堆肥用の土や畑にまく腐葉土を拝借しにでかけます。庭の一角を占める畳二枚ほどのささやかな畑にはネギ、インゲン、オクラ、シシト、キャベツなどを育てていますが、できたものはみずみずしさはあっても、味はまだまだでした。四月か

ら畑として庭を改造したばかりで、まだ土づくりを始めている時ですから。ついでにこの四月からは第二の人生をスタートしました。少し早いのですが、何とか続いた三十二年間の仕事と別れました。普段は昼寝とテレビを見て、ポケーツとして居る調子です。その合間にバドミントンの練習で若い奥様方にしごかれ、これもまた参加することに意義ありと環境問題の学習会や自然観察講座に積極的に参加しています。何とか社会との繋がりを持つと悪戦苦闘しているしだいです。

この先、伊那を新天地として、暮らしていきたいとなぜか数年前から思っています。ただ仕事はする気はないし、かといって晴耕雨読では多くの場合は痴呆症行きにまつしぐらです。少しは我が身にあう山の周辺のこと、そして今はやりの社会貢献も含めて森林ボランティアをやってみるかとなりまして。そんな思いつきで参加さ



せていただきました。後半のおつき合い、よろしくお願います。また十二月の忘年会楽しみにしています。

### コラム

涼風が吹く気持ちのいい季節になってきました。そんな季節に気になりだすのがキノコの発生状況。なかでもマツタケ。実は伊那市の新山という所に、とある会で借りているキノコ山があり、ここにマツタケのシロ(発生する場所)が一つあります。このシロを中心として、毎年整備を行って居ます。

そこは、マツタケが環境の整備によって増やせるかどうかの実験場。整備についてはいろいろノウハウがあります。一言で言うところ、昭和三十年代の山」というのがキーワードになります。なぜなら、その頃が一番マツタケが出たから。最近では全国の生産量が百トンを超えている状況に対し、なんと三十年代は八千トン近くも採れているのです。このことは、マツタケが発生するのに適した環境だったということ。それは、山が大いに利用されていた時代環境です。

詳細は省きますが、今年は整備も進んできたところで、かつ気象条件もまずまずなので、



です。このまま暑さがぶり返さずに気温が下がってくれば、と大いに期待しているところでは。

「イントラ 川島」

### おわりに

今年は冬が早く来るのだからかと思いつながら、薪作りの手伝いをする週末がつづいている。今シーズン用のアカマツをどっさり、来シーズン以降のカラマツを少々。アカマツは、火持ちは悪いものの、火付きがよく火力が強い。カラマツは二夏乾燥させると広葉樹並。針葉樹の新木すがたいです。

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。

TEL 0265-70-7065  
FAX 0265-70-7994



E-mail:  
sh-sakano@koanet.co.jp  
ki-hayakawa@koanet.co.jp  
携帯:090-4463-0062(開催日)  
URL http://www.koanet.co.jp